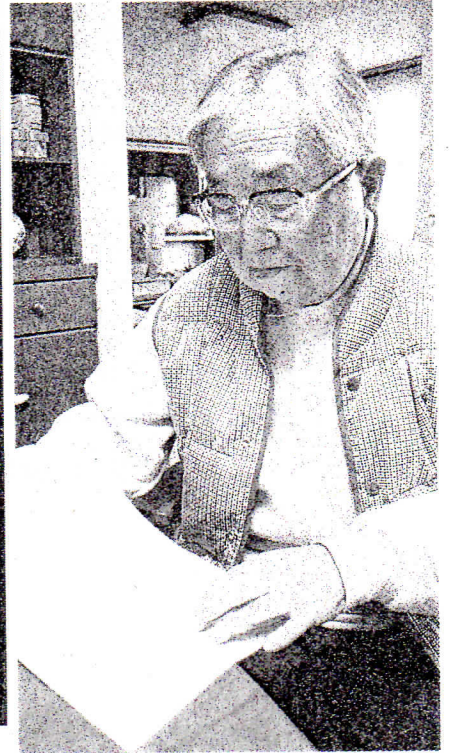


当時の職場の見取り図を書いた紙を手に、郵便物の検閲について語る川田隆さん＝神奈川県藤沢市



敵国に味方

誰にも話したくはない過去だった。「やはりかつての敵国、アメリカの仕事をするというのは不愉快でした」。神奈川県藤沢市の元会社員、川田隆さん(88)は、66年の歳月を経て、郵便物の検閲をしていた当時の話を語り始めた。

東京商科大(現一橋大)在学中の1947(昭和22)年4月。友人の紹介で、JR東京駅前の中央郵便局に置かれたCCD(民間検閲局)に働き口を求めた。父親は軍人。終戦で収入は途絶え、家族が生きていくための選りだされた。一日平均200通から300通の手紙を開封した。恋文や親しい人への

国民監視

郵便検閲の真実②

2014.1.22

た後ろめたさが、元検閲官たちの口を閉ざしてきた。その結果、郵便検閲の実態が伝えられてこなかった」と指摘する。

近況報告…。「覚えてお

いてはいけない。建物を出ると、記憶から消すように意識しました」。当時の仲間と会っても、誰も検閲の話には触れたがらなかった。

山本武利・早稲田大名誉教授は「敵国に味方し

黙して語りず。そんな中、甲斐弦・元熊本学園大名誉教授(2000年死去)は沈黙を破り、自らの体験を世に著した。95年出版の著書「GHQ検閲官」には当時の日記を基に、検閲の実態や心境がつつられている。

甲斐氏が福岡市のCCDで、郵便検閲の仕事をしたのは46年10月から2カ月間。検閲で引掛かった蘭商人の手紙を上司の指示で全文翻訳し、後日、商人が逮捕されたとの記述もかいま見ること

後ろめたさ…口を閉ざす

「アメリカの犬となった」「同胞の秘密を盗み見る。実に不快な仕事」。そうした記述に心の葛藤が見てとれるが、家族を養うためにはやむを得ない選択だった。著書には「食ってこく」とは一切に優先する」と記す。

甲斐氏の次男で、元九州共立大教員の明氏(66)「北九州市」は「父はよく、『歴史は仮想体験。実際に体験した人の証言で裏付けることが重要』と話していました」。克明な日記を残し、出版に踏み切ったのも、そう思った思いが強かったのではないかという。

一方、川田さんが郵便検閲の経験を明かしたのは2010年。東京商科大の卒業60年誌に投稿。それまで家族も含め、誰にも語ったことはなかった。

「かつての同僚はくくなり、知る人はわずかになった。もつ時効だろう。聞きに来る人がいれば、話をしようと思いをくつた」。元検閲官たちが重い口を開き始めた。

(岡恭子、本田清悟)